



入佐 美南子

■ 岡本太郎、『今日の芸術—時代を創造するものは誰か』、光文社知恵の森文庫、1999年（復刻版）。

内容紹介 「今日の芸術は、うまくあつてはならない。きれいであつてはならない。ここちよくあつてはならない」。一斬新な画風と発言で大衆を魅了しつづけた岡本太郎。この書は、刊行当時、人々に衝撃を与え、ベストセラーとなった。彼が伝えようとしたものは何か?時を超え、新鮮な感動を呼び起こす「伝説」の名著。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 美術、歴史、民族学など広範な知識を駆使し、論理的に展開しているが、創作者の実体験に基づく論述だけに退屈させない。また全編を貫く著者の芸術に対する深い信念が文章に勢いを与え、停滞を嫌い常に前進する画家の人間像が印象に残る。刊行当時、芸術を志す者に競って読まれた本書は、簡略だがオーソドックスな美術史入門でもある。

■ 高階秀爾、『続名画を見る眼』、岩波新書 青E-65、1971年。

内容紹介 西洋美術鑑賞の懇切な手引として好評の『名画を見る眼』の続篇。本書では、モネ以後の近代絵画の名作をとりあげて、その題材、表現方法、技術、歴史的・思想的背景などを解説する。印象派・後期印象派をはじめ、素朴派、立体派、表現主義などの諸潮流から抽象絵画まで、その精華を紹介しつつ、豊かな美術の世界へと読者を導く。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 取り上げられている画家は、教科書に載っている有名な画家ばかりであるが、西洋美術鑑賞の手引きとなり、近代絵画を知る入門の一冊である。作品に込められた意味、駆使されている技法、画家の生涯、時代背景、その作品が後に与えた影響までを丁寧に解説している。

■ 大竹伸朗、『見えない音、聴こえない絵』、新潮社、2008年。

内容紹介 尽きることのない創造への衝動、その原点たる少年期の追憶から「全景1955-2006」展へ向けての軌跡、創作の日々のなかで心に浮上する現在と未来を記録したエッセイ集。（本書帯より）画家大竹伸朗が、少年期の創作についての衝動や、2006年に東京都現代美術館で開催された大回顧展「全景展」への軌跡を書いたエッセイで、月刊誌「新潮」に連載のものと連載開始前の一編をまとめたもの。

推薦理由 画家の日常思うことや、日々の作品制作に関わる様々なテーマや素材、動機など具体的な思考、少年期の記憶や、様々な体験から作品制作に至る思考がわかりやすく書かれている。制作に直結する衝動や思いを言葉に置き換えたいとして、読みやすい文章で書かれているが、本質的な深い内容を考えさせる本である。



宇野 和幸

■ ヒュー・オールダシー=ウィリアムズ、『元素をめぐる美と驚き—周期表に秘められた物語』（安部 恵子他訳）、早川書房、2012年。

内容紹介 化学の代名詞、周期表に並ぶ元素たち。その、元素が秘める/元素を秘めたエピソードを、豊かなイメージを喚起する写真を満載して贈る科学読み物。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 科学の本ではあるが、美術に関わる記述も多く楽しくためになる本だといえる。

■ 歌田眞介、『油絵を解剖する—修復から見た日本洋画史』、NHKブックス No. 932、2002年。

内容紹介 幕末・明治の激動期に、油絵という西洋のまなざしに会った高橋由一ら先駆者たち。絵画修復の現場から、油絵技法と絵具・画布等の材料に基づき、日本人の絵画空間の捉え方や物の見方における問題点を指摘。本格的な絵画評論。

推薦理由

■ 九鬼周造、『「いき」の構造』、岩波文庫 青146-1、1979年。

内容紹介 「粋」とは何か?横縞より縦縞が、赤・黄色より茶・鼠色が「いき」なのはなぜか?著者はヨーロッパの哲学を下敷きに、歌舞伎、清元、浮世絵、文様等々の芸術各ジャンルを横断し、この美意識に潜む「異性への媚態」「江戸文化の意気地」「諦めと恬淡」を解説していく。

推薦理由

■ 原田マハ、『楽園のカンヴァス』、新潮文庫、2014年。

内容紹介 それは真っ赤な贋作か、知られざる真作か?傑作アートミステリー! ニューヨーク近代美術館(MoMA)の学芸員ティム・ブラウンは、スイスの大邸宅でありえない絵を目にしていた。ルソーの名作『夢』とほとんど同じ構図、同じタッチ。持ち主の富豪は真贋を正しく判定した者に作品を譲ると告げる。好敵手(ライバル)は日本人研究者、早川織絵。リミットは七日間——。カンヴァスに塗り籠められた真実に迫る渾身の長編!

推薦理由

■ 佐藤一郎、『絵画制作入門—描く人のための理論と実践』、東京藝術大学出版会、2014年。

内容紹介 絵画制作を本格的に始めてみようと思う人々のために、絵画制作に対するさまざまな基本となる知識を学び、実地に絵画制作に進む手立てとしてまとめたものです。東京藝術大学油画専攻1年生を主な対象として開講している「絵画技法史・絵画材料論」で佐藤一郎が講義してきた内容を中心に、理論編として「絵画学の基本」、「顔料と媒材」、「素描に使われる絵画材料」、「画家の絵画技術」を、実践編として「支持体・地塗り・絵具層」、「支持体と地塗りの実地」、「絵画材料の実地」、「絵画技術の実地」の各章に分けて詳説しています。

推薦理由

■ 島田荘司、『写楽 閉じた国の幻（上・下）』、新潮文庫 し-28-2、し-28-3、2013年。

内容紹介 世界三大肖像画家、写楽。彼は江戸時代を生きた。たった10ヵ月だけ。その前も、その後も、彼が何者だったのか、誰も知らない。歴史すら、覚えていない。残ったのは、謎、謎、謎——。発見された肉筆画。埋もれていた日記。そして、浮かび上がる「真犯人」。元大学講師が突き止めた写楽の正体とは……。構想20年、美術史上最大の「迷宮事件」を解決へと導く、究極のミステリー小説。

推薦理由

■ 服部まゆみ、『レオナルドのユダ』、角川文庫、2006年。

内容紹介 神に選ばれし万能の天才一画家にして彫刻家、科学者、医師、音楽家でもあったレオナルド・ダ・ヴィンチ。気高く優雅な魅力を放つ彼の周りには、様々な人々が集っていた。貴族の跡取り息子でありながら、レオナルドに魅せられて画房の弟子となったフランチェスコ。絶世の美青年だが、傍若無人なふるまいで周囲を混乱させるサライ。そして、レオナルドの才能を決して認めようとしなない毒舌の人文学者パーオロ。天才レオナルドの魅力を真摯に描き、彼が遺した『モナ・リザ』の謎に迫る、著者渾身の歴史ミステリー。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 ミステリーという体裁ではあるが、芸術家たちの息遣いが聞こえるような描写も多く、楽しめる。



倉山 裕昭

■ エルンスト・H・ゴンブリッチ、『美術の物語』（天野衛／大西広／奥野皐他訳）、ファイドン、2007年。

内容紹介 太古の洞窟壁画から現代の絵画に至るまでの1万年以上に渡る美術の歴史を平易な文章で語った西洋美術史の名著。1950年に出版されて以来35ヶ国語に訳され、美術を学ぼうとする学生や研究者たちの入門書として広く読み続けられています。

推薦理由 専門用語を排し、幅広い層に語りかけるような口調で書かれており、非常に読み易い美術入門書です。一つの様式が次の様式に移り変わる様や、「美術」が時代を経る毎にどのような役割を担ってきたのかがゴンブリッチ教授の視点を通して、あたかも壮大な物語を読むように理解できます。

■ オリヴァー・サックス、『火星の人類学者』（吉田利子訳）、ハヤカワ文庫、2011年。

内容紹介 すべてが白黒に見える全色盲に陥った画家、激しいチックを起こすトゥレット症候群の外科医、「わたしは火星の人類学者のようだ」と漏らす自閉症の動物学者…脳神経科医サックスは、患者たちが抱える脳の病を単なる障害としては見ない。それらは揺るぎないアイデンティティと類まれな創造力の源なのだ。往診=交流を通じて、不可思議な人生を歩む彼らの姿を描き出し、人間存在の可能性を謳った驚きと感動の医学エッセイ。（文庫裏表紙解説より）

推薦理由 視覚や記憶などの認知機能に様々な障害を持つ患者の日常を詳細に観察し、彼らには世界がどのように見えているのか、それをどう感じているのかを描き出しています。私たちには想像もできなかった「光景」にまず圧倒されますが、その日常のなかで絵画、医術、建築設計などの創造行為を生み出す彼らの姿には芸術の根源とも言える力を感じることができるでしょう。

■ オルハン・パムク、『わたしの名は赤』（宮下遼訳）、ハヤカワepi文庫、2013年（第3版）。

内容紹介 1591年冬。オスマン帝国の首都イスタンブルで、細密画師が殺された。その死をもたらしたのは、皇帝の命により秘密裡に製作されている装飾写本なのか…?同じころ、カラは12年ぶりにイスタンブルへ帰ってきた。彼は件の装飾写本の作業を監督する叔父の手助けをするうちに、寡婦である美貌の従妹シェキュレへの恋心を募らせていく一東西の文明が交錯する大都市を舞台にくりひろげられる、ノーベル文学賞作家の代表作。（文庫上巻裏表紙解説より）

推薦理由 この物語の中心となるのはペルシア細密画のイメージとその絵師たちの価値観の変化です。西洋絵画のような透視図法を持たず、非中心的に配された様々な細部によって構成される細密画と同じく物語は1章ごとに異なる登場人物によって語られ、しまいには犬や木、貨幣までが語り部に加わります。絵師たちは自らの様式と西洋からの影響との間に立たされ、価値観の対立によって引き裂かれていきます。自分は何を、何のために作品を作るのか、そこにはどんな意味があるのかについて考えさせられる物語です。



佐々木 正子

■ 岡倉天心、『茶の本』大久保喬樹、角川ソフィア文庫、2005年。

内容紹介 茶道をとりあげ、その歴史をたどりながら、人間とは何かを見つめ、美や文化、精神活動などを考察する内容。ただお茶を飲むという日常的行為さえも、美と文化とに取り囲まれれば、崇高な「道」としての高みにまで登っていく。芸術の力を知る啓蒙の書。

推薦理由 人間性、文化、美、精神など根本的なところから見つめ直すきっかけになる。



仲 政明

■ 近藤豊、『古建築の細部意匠』、大河出版、1996年（第19版）。

内容紹介 京都とその周辺には、日本の代表的な古建築が密集している。私は幸いに、そういった京都に生まれ育ってきた。そして古建築の美に魅せられたあまり、その研究を一生の仕事とするようになった。必ず出される質問には細部意匠とその時代的特徴に関するものが多かった。本書はそんな点について、初学者の方を対象にかなり詳しく解説してみたつもりである。（表2文言より抜粋）

推薦理由 古建築に関する意匠を学ぶ者にとっては、バイブル的存在の1冊である。意匠のことに関してこれほどまでに細部にわたり説明されている書物は類を見ない。彼の独断的解釈も認められるが、そこには意匠に対する近藤の愛と熱意を感じる。専門書ではあるが、一般の読者にも一からわかる様に丁寧に説明がされており、読み進むにつれ深く入り込んでいく。ここには古建築の解説だけではなく、それを通してものを見て思考するということが、どういふことなのかを感じさせてくれるとともに、古建造物の魅力を余すところなく伝えてくれる。

■ 村上華岳、『畫論』、中央公論美術出版、1989年（新装普及版）。

内容紹介 名作「日高河清姫」など近代日本画史上の孤峰として深い精神性と内省、弛みない精進に生きた村上華岳。彼が生前に発表した感想に作画態度の覚え、思考メモ、日記なども克明に網羅した不世出な画家の制作過程を知る道標。（本の帯より）

推薦理由 村上華岳が自身の記録として書いた文章であり、華岳の飾らない本心を読み取ることができる。芸術とは何なのか、またそれを創造する芸術家とはどう生きなければならないのかということ、苦悩しながらも厳しく内省を繰り返している。そこにはその苦悩を生きる喜びと感じているようにさえ思える。その文章からは彼の作画に対する真摯な姿勢と熱意が十二分に感じ取ることができ学生には是非とも一読願いたい。



濱田 弘明

■ マルセル デュシャン／ピエール カバンヌ、『デュシャンは語る』（岩佐鉄男/小林康夫訳）、ちくま学芸文庫、1999年。

内容紹介 論理的な説明をこえ、自由で知的な作品を展開し続けたマルセル・デュシャン。革新的な作品の数々はもちろん、その思想や問題提起に触発され豊かな実りを生んだ芸術家はジョン・ケージら数知れない。「幸運にめぐまれました」にはじまり、「私は幸せです」に終わるこのインタビューは、希代の芸術家の生き方と感情、創造に向かって生きた言葉で開かれている。なぜ作品制作を放棄したのか、ガラスを使うというアイデアはどこから生まれたのか、もっとも親しかった友人は…。複雑で簡明、常識的で崇高、不思議と明るく、あっけらかんとした生の展開を通して、ある高度な精神的態度が力強く貫かれていく軌跡。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 現代美術を語る上で、最も重要な作家の一人である、マルセル・デュシャンがどのような人で、何を考えて、どの様に作品を生み出したのかを知ることができる。、インタビュー形式なので、作家本人が語る、作品制作の経緯や裏話など、生々しさが興味を引く。



日野田 崇

■ しりあがり寿、『表現したい人のためのマンガ入門』、講談社現代新書1847、2006年。

内容紹介 マンガだからできることって何だろう?描きたいことを描いて、しかも売れるにはどうすればいいか。ほのぼの4コマからストーリー大作まで幅広く活躍する筆者が、自作の解説を交じえて、丁寧に教える。(Amazon書籍紹介より)

推薦理由 表現する側の当事者の切実な声がある。表題通り、マンガのみならず表現する人すべてに関わる問題を扱っていると思われるため。

■ 吉井仁美、『現代アートバブル』、光文社新書 369、2008年。

内容紹介 アートバブルという言葉がにわかに注目を集めています。ここ数年、現代美術を扱うアートマーケットが空前の高騰を続けており、投資資産としても関心の的となっています。雑誌メディアでは頻繁にアート特集が生まれ、テレビや新聞紙面でもアートマーケットの話題を目にするようになりました。いま、現代アートの世界でいったい何が起きているのでしょうか。私はこの本を通して、多くの人に現代美術の状況や、選び方、そしてなにより楽しみ方を伝えていきたいと思っています。(「はじめに」より抜粋)

推薦理由 つくられた作品がどのような背景とシステムによって世の中に流通していくのか、芸術に関わるものには避けて通れない命題である。上記の「現代アートビジネス」とほぼ類似したテーマを扱っているが、若干視点の違いがあり、読み比べるのも興味深いと思われるため。

■ 小山登美夫、『現代アートビジネス』、アスキー新書 061、2008年。

内容紹介 「現代アートの世界はよく分からない」という方も多いのではないのでしょうか? とくに、その「価値」がどこにあるのか、それがどのように値段に反映されて「商品」になっていくのかは、とても見えにくいものです。本書では、数々の若手アーティストを発掘し、日本発の新しいマーケットを築いてきた著者が、豊富な経験をもとにそれらをわかりやすく説いています。アーティストになりたい人、ギャラリストなどアート関係の仕事に就きたい人、アートで儲けたいと思う人、アートをるのが好きな人、みなが良い意味で刺激を受けるはずです。(出版元プレスより)

推薦理由 つくられた作品がどのような背景とシステムによって世の中に流通していくのか、芸術に関わるものには避けて通れない命題である。

■ 森村泰昌、『「美しい」ってなんだろう? 美術のすすめ』、理論社、2007年。

内容紹介 美しさ、ってなんだろう?かわいいかかっこいいかはよく言うけれど、それって、じつは「美しさ」のなかの小さなひとつでしかない。一見きれいじゃないものも、大したように見えないものも、いつもの見方を変えれば、すごく美しく見えてくるものがある。新たな美しさの発見と人生の豊かさの関係を、トップアーティストが、身近な形式で特別講義。(出版元プレスより)

推薦理由 中高生用の読み物シリーズではあるが、非常に平易に美術を志すものへの魅力を力強く説いており、「芸術の力」入門編として最適と思われるため。

■ 榎木野衣、『増補 シュミレーションイズム』、ちくま学芸文庫、2001年。

内容紹介 恐れることはない、とにかく「盗め!」世界はそれを手当たり次第にサンプリングし、ずたずたにカットアップし、飽くことなくリミックスするために転がっている素材のようなものだ—「作家」と「作品」という概念およびその成立の正当な基盤とされる歴史性と美学、ひいては「近代」の起源そのものの捏造性を看破、無限に加速される批評言語の徹底実践とともに、まったく新たな世界認識のセオリーを呈示し、その後のアート、カルチャーシーンに圧倒的な影響を与えた名著。「講義篇」増補を含む。(「BOOK」データベースより)

推薦理由 やや難解な箇所もあるが、1990年代以降の美術を理解するために必須と思われるため。



松本 泰章

■ ジャン・ルノワール、『わが父ルノワール』（粟津 則雄訳）、みすず書房、2008年。

内容紹介 著者ジャン・ルノワールは1894年9月15日にパリで生まれた。ルノワールの第二子である。「どん底」（1936）、「大いなる幻影」（1937）、「河」（1950）等かずかずの名作を残したこの高名な映画監督については今さら解説の用はあるまい。彼のファンならば、本書中の随所に、彼独特の巧妙な映画的手法が見事な効果をあげているのを見てとることが出来るだろう。注意深い読者なら、絵画と映画というように世界は異なるが同じくイメージを追ったこの芸術家父子の深い類似を見てとることも出来るだろう。だが、この美しい伝記のもっとも根本的な特質はそんなところにはない。著者が父ルノワールに捧げている無私と評したいような敬愛の念にある。（「訳者あとがき」より）

推薦理由

■ ロベール・ブレッソン、『シネマトグラフ覚書—映画監督のノート』（松浦 寿輝訳）、筑摩書房、1987年。

内容紹介 ロベール・ブレッソンは、極限まで切り詰められた素材で完全にオリジナルな映像世界を創造した寡作の天才である。彼以上に「映像作家」という呼称がしっくりくる監督もいない。「シネマトグラフ」と呼ばれるその数少ない作品で、彼は素人の「モデル」を起用し（俳優ではなくモデルと呼ばれた）、音楽の使用を最小限に抑え、演出上の仰々しさ、派手さ、センチメンタリズムを排除し、登場人物の孤独を淡々と、冷たく、容赦なく映し出す。観客の同情や共感などあてにしていない。特定のキャラクターに温情をかけたり、ストーリーにメッセージ性を持たせたりもしない。彼が注力したのは、人物の目線や動作のフォルムの様式化である。それを、技術を匂わせないようにしながら行っている。その簡略化された様式が、想像力の起爆装置となり、観る者の心に忘れがたい印象を刻み残す。（<http://www.hanano.jp/movie/kantoku/kantoku27.html>）

推薦理由

■ 古橋悌二／ダムタイプ、『メモランダム 古橋悌二』、Little More、2000年。

内容紹介 本書は、ダムタイプのオリジナル・メンバーの1人であり、1995年にエイズによる敗血症のため35歳で夭折した古橋悌二が生前に残した、美術展カタログなどへの寄稿文、友人たちにHIV陽性であることを告げる書簡、彼の受けたいくつかのインタビュー、「S/N」終演後のアフター・トークの採録、などにより構成されたものである。人生に対して、芸術に対して、友人に対して、現代社会のあり方に対して、ゲイであることやHIV陽性であることに対して、そのどれについて語る彼の言葉も、曇りなき真摯さに貫かれ、それは読者の心に深く突き刺ささずにはおかない。これほどの真摯さにあふれた同時代の言葉を目にしたり耳にしたりする機会は、そうそう得られるものではない。（岡田工猿）

推薦理由

■ 中村彝、『芸術の無限感』、中央公論美術出版、2004年。

内容紹介 日本近代美術史上の重要な画家中村 彝（つね）。現在もその作品は日本中の美術館に収蔵されている。とりわけ「エロシエンコ氏の像」（重要文化財・東京国立近代美術館蔵）や、複数の相馬俊子像はきわめて重要な作品である。しかし、中村 彝は不幸にも結核で38歳の若さで亡くなっている。本書は、その中村 彝の死後に友人らによって編まれた彼の残した文章、詩、書簡集であり、彼の直接発した生の声が聞ける貴重な本である。全編を通じて伝わってくるのは、彼の生き方—マニフェストである。内面と行動の一致、精神性を強く重んじる恋愛・・・などなど、大正の生命主義とも呼ぶべき熱い思いに満ちている。（kiki、amazon.co.jpのカスタマー・レビュー、<http://www.amazon.co.jp/芸術の無限感-中村-彝/dp/4805512156>）

推薦理由



芳野 明

■ イタロ・カルヴィーノ、『なぜ古典を読むのか』（須賀敦子訳）、河出文庫、2012年。

内容紹介 卓越した文学案内人のカルヴィーノによる、最高の世界文学ガイド。“古典とは、ふつう、「いま、読み返しているのですが」とはいつでも、「いま、読んでいるところです」とはあまりいわない本である”との古典の定義にはじまり、ホメロス、スタンダール、ディケンズ、トルストイ、ヘミングウェイ、ボルヘス等の古典的名作を斬新な切り口で紹介する。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 「古典」と聞くだけで毛嫌いする人も多いだろう。しかし、「古典とは、最初に読んだときとおなじく、読み返すごとにそれを読むことが発見である書物である。」（12頁）とあるとおり、常に新しいものを私たちにもたらしてくれる。そういう本や映画、美術や音楽を見つけ出して欲しい。

■ スウィフト、『ガリヴァー旅行記』（平井正穂訳）、岩波文庫 赤209-3、1980年。

内容紹介 子供のころ誰しも一度はあの大人国・小人国の物語に胸を躍らせたにちがいない。だが、おとなの目で原作を読むとき、そこにはおのずと別の世界が現出する。他をめぐり自らをえぐるスウィフト（1667 - 1745）の筆鋒はほとんど諷刺の枠をつき破り、ついには人間そのものに対する戦慄すべき呪詛へと行きつかずには止まない。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 文芸という芸術の「力」を知るにはうってつけかと思う。これほど面白くて、これほどソツとさせられるものは本当に数少ない。デフォーの『ロビンソン・クルーソー（上・下）』（岩波文庫 赤208-1,2）と併せて読むと、スウィフトの慧眼に感心させられるとともに、デフォーのような態度は決してとるまいと心に誓いたくなる。当たり前を疑うことの大事さをほんとうによく伝えてくれる名著。

■ デビッド・マコーレイ、『カテドラル 最も美しい大聖堂のできあがるまで』（飯田喜四郎訳）、岩波書店、1979年。

内容紹介 ゴシックの大聖堂の計画から完成までを、緻密なペン画で場面を追って克明に描き出し、わかりやすい文章で解説した画期的な絵本。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 芸術が人を動かすということが実によく理解できる書物。作品とはたったひとりの作家のなにもものにもとられない創造物なのではなく（そんなことは幻想にすぎない）、社会的な産物なのであらためて感じさせてくれる。また、この本自体も優れた芸術作品ということができる。

■ ベンヴェヌート・チェッリーニ、『チェッリーニ自伝—フィレンツェ彫金師一代記 上・下』（古賀弘人訳）、岩波文庫 赤711-1/2、1993年。

内容紹介 16世紀イタリア・ルネサンスが生んだ名彫金師ベンヴェヌート・チェッリーニ。その名をいっそう高めたのがこの『自伝』である。ライバルとの確執、老獪な法王やメーディチ家との駆引き、旅、戦争、女、殺人、投獄…。自己の才能への強烈な自負と野心をむきだしに、時代を豪放に生きたルネサンス人の波乱の生涯。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 立派な作品を作るには、品行方正である必要があるのだろうか。われわれはつついふたつの異なる価値を平行に捉えてしまっていないだろうか。稀代の彫刻家の「ジェットコースター自伝」というにふさわしい、溢れんばかりの生がここにある。

■ 佐々木健一、『美学への招待』、中公新書（1741）、2004年。

内容紹介 二〇世紀後半以降、あらゆる文化や文明が激しく急速に変化しているが、芸術の世界も例外ではない。複製がオリジナル以上の影響力を持ち、作品享受も美術館で正対して行うことから逸脱することが当たり前になってきている。本書は、芸術が、いま突きつけられている課題を、私たちが日常抱く素朴な感想や疑問を手がかりに解きほぐし、美と感性について思索することの快楽へといざなう、最新の「美学入門」である。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 学生の時、自分は「美学・西洋美術史」研究室に所属していた。だから、「美学普通講義」とか「美学特別講義」が必修科目だった。世にある有名な「美学入門」や「美学史」の類を読んで勉強しようと思ったが、まさに1頁も理解できなかった。しかし、この本は違う。「美学」といういかにも古くさそうな名前の学問が、いかに我々の身近にあるものを問題にしているのかがよくわかる好著。

■ 市村弘正、『「名づけ」の精神史』、平凡社ライブラリー 152、1996年。

内容紹介 分裂病者の世界に、「名づけ」の経験の変容に、路地の文化史に、「乏しき時代」現代の精神のありかを見とる。多領域の論者に深く静かな衝撃を与えつづける思索。世界への哀悼のかたちでの思考の試み11篇。（「MARC」データベースより）

推薦理由 「物の本来の名前を忘却しつつある人間の愚かさ、自らの都合に合わせて勝手な名前を付与するその傲慢さ」（154頁）。この警告ともいえる一節を読むだけで、物に名前を付ける行為に秘められた深い意味が知られる。

■ 若桑みどり、『レット・イット・ビー』、主婦の友社、1988年。

内容紹介 きつといい日かくる。イタリアが好き、下町が好き、ビートルズが好き。映画館よりビデオが好き。涙より笑いが好き。「江戸っ子」西洋美術史家の型破りエッセイ。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 芸術に全力を投じすぎたと言ってよい、著者の日常を知ることができる。つまり、芸術に対して徹底的にその生を注いだ結果—というよりは進行形だが—一生まれ、ひとりの「大人」のあり方が伝わってくる。すでに絶版となっているが、なんとか探し出して読んでもらいたい本である。

■ 長岡龍作、『仏像一祈りと風景（日本文化 私の最新講義）』、敬文舎、2014年。

内容紹介 仏像はどこに置かれたのか? 「極楽浄土」と「山水」から読み解く長岡美術史の決定版!! 日本列島に生きた人々の声が聞こえてくる!（「BOOK」データベースより）

推薦理由 「目から鱗が落ちる」というのは、まさにこの本のためにあるような言葉だと思う。人が仏像にこめた思い—なんで造るのか、なんで拝むのか—といったこと—を、まさに「寺」を越えた壮大なスケールで説明する。大覚寺をはじめとして、京都の仏像の話も登場するので、京都にいるうちに読んでおくべき本。



安齋 レオ

■ 沼田元気、『喫茶店(カフェ)百科大図鑑—ぼくの伯父さんのスクラップブック』、ギャップ出版、2002年。

内容紹介 全国の喫茶店をさまざまな切り口で紹介。喫茶店で使用されるマッチ、さまざまなデザイン、それが登場する映画や漫画、またそのデザイン全般で紹介。多くの物を収集することの楽しさを知って欲しい。

推薦理由 今ではあまり見かけなくなった懐かし喫茶店を多数紹介。写真が多くどこにもない懐かしさを演出しています。著者の沼田元気のセンスを知って欲しい。

■ 中村伊知哉、『コンテンツと国家戦略』、角川書店、2013年。

内容紹介 ニッポンのポップカルチャーを国家財産ととらえ、これらコンテンツを利用して知的財産立国を目指すプロジェクトの紹介。

推薦理由 クールジャパンと呼ばれるものが何なのか知る事が出来る。日本の芸術としてPOPカルチャーを世界に売り出すことを紹介しているので学生に是非読んで欲しい。



上田 香

■ 大橋鎮子 編著、『すてきなあなたに』、暮らしの手帖社、1994年～。

内容紹介 1969年から連載が続く『暮らしの手帖』誌の人気エッセイです。実際に目でみて素敵だと思ったこと、人と接している時に感じた素敵なこと、心に深く染み込んでいったこと、食事の時に美味しかったものとそのレシピなど、日常の生活で感じて、メモに書き留めたものを綴っています。本書、第1巻は、1969年から1974年までの連載をまとめたものです。（暮らしの手帖社Webサイト、https://www.kurashi-no-techo.co.jp/books/b_1029.htmlより。現在6巻迄出版されています。）

推薦理由 高校生、大学生の頃、母が読んでいた物を本棚から見つけて読んでいました。生活を豊かにする美しい気付きの数々が短いエッセイで綴られており、自分自身の生活に当てはめて想像出来てワクワクします。日常のこと、旅、食事、インテリア、おしゃれなど様々なトピックがあり、創作のアイデアになることもありました。現在は、母から私の本棚に移動し、たまに手に取って見っていますが、装丁やイラストも美しく長く愛せる本です。

■ 里文出版 編著、『サヨナラ、民芸。こんにちは、民藝。』、里文出版、2011年。

内容紹介 これからの時代における「民藝」を考える柳宗悦を巡る6つの対談集。染織家の志村ふくみ氏からエフスタイルまで、さまざまな分野や年齢の人々が「民藝」について語っています。

推薦理由 タイトルに惹かれて手に取りましたが、現代における「民藝」を考える上で、大変興味深い内容です。それぞれの分野のプロが日々の仕事の中で感じるこれからの「民藝」の在り方が対談形式でリアルに書かれている為、自分にとっての「民藝」とは？あるいは「物作り」とは？と考えるきっかけになるかもしれません。



江村 耕市

■ 伊藤 亜紗、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』、光文社新書、2015年。

内容紹介 私たちは日々、五感—視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚—からたくさんの情報を得て生きている。なかでも視覚は特権的な位置を占め、人間が外界から得る情報の八〜九割は視覚に由来すると言われていた。では、私たちが最も頼っている視覚という感覚を取り除いてみると、身体は、そして世界の捉え方はどうなるのか？美学と現代アートを専門とする著者が、視覚障害者の空間認識、感覚の使い方、体の使い方、コミュニケーションの仕方、生きるための戦略としてのユーモアなどを分析。目の見えない人の「見方」に迫りながら、「見る」ことそのものを問い直す。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 視覚芸術表現を志す者にこそ必読じゃないだろうか、と感じた。ユニバーサルデザインのある喜びに触れることができるんじゃないかと思えます。

■ 伊藤 亜紗、『目の見えないアスリートの身体論』、潮新書、2016年。

内容紹介 あなたは目をつぶって一〇〇メートルを走れますか？リオ戦士たちの「目で見ない」世界はおもしろい。（amazon「BOOK」データベースより）

推薦理由 身体について、感じ直す必要があると感じています。

■ 石牟礼道子、『新装版 苦海浄土』、講談社文庫、2004年。

内容紹介 人の尊厳とは何か いまこそ心打つ〈声〉を聞いてください。工場廃水の水銀が引き起こした文明の病・水俣病。この地に育った著者は、患者とその家族の苦しみを自らのものとして、壮絶かつ清冽（せいれつ）な記録を綴った。本作は、世に出て30数年を経たいまなお、極限状況にあっても輝きを失わない人間の尊厳を訴えてやまない。未永く読み継がれるべきくいのちの文学〉の新装版。（出版社/著者からの内容紹介 amazon.co.jp）

推薦理由 魂の言葉と出会えます。フィクションとノンフィクションの間の表現から力強いエネルギーが迫ってきます。苦海浄土（池澤夏樹=個人編集 世界文学全集 第3集）河出書房新社（2011/1/8）の方が良いのですが、4428円するので文庫を推薦しました。

■ 大友良英、『学校で教えてくれない音楽』、岩波新書 新赤-152、2014年。

内容紹介 学校の音楽の時間が大嫌いだっただあなたも、合唱で声を出すふりだけしていきみも、「音楽の根っこにある一番大事なものを」知った瞬間から、音を声を、出せるようになる。音楽の授業が苦手だった「孤高の即興ノイズ演奏家」にして「あまちゃん」の音楽でも知られる百戦錬磨の音楽家が、「音楽の原石」のつかみとり方を語る。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 フェスティバルFUKUSHIMAなどで大忙しの大友さんがその合間に中学校でおこなった授業がきっかけでできた本です。音楽の、そして芸術の本質に触れるために読んでおきたい本。「音痴はない。」と帯に書かれています。この本に限らないんですが、私（江村）は大友さんの文章を読むと、身体が震えて涙が出てくるのがよくあります。

■ 池澤夏樹、『世界文学を読みほどく』、新潮選書、2005年。

内容紹介 私たちは、物語や小説によって、自分たちのいる世界を表現し、同時にそのありかたを掴んできた。では、小説とは何か。世界はどう私たちを取り囲んでいるのか。小説と世界は、どのように影響しあい変遷し、その結果どこに達したのか。稀代の読み手であり、誠実な発信を続けてきた作家が、21世紀の今に生きる人々に向けて語る、文学観・世界観の集成。京大講義録。（amazon「BOOK」データベースより）

推薦理由 多様な文化を巡る旅のガイドブックです。表現についてのヒントがいろいろと詰まっています。

■ 保坂 和志、『書きあぐねている人のための小説入門』、中公文庫、2008年。

内容紹介 小説を書くときにもっとも大切なことは?実践的なテーマを満載しながら、既成の創作教室では教えてくれない、新しい小説を書くために必要なことをていねいに追う。読めば書きたくなる、実作者が教える“小説の書き方”の本。著者の小説が生まれるまでを紹介する、貴重な「創作ノート」を付した決定版。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 小説の書き方という内容ですが、美術作品にもそのまま応用できると受け取りました。どんどん読めます。

■ 矢部 宏治 (著)／須田 慎太郎 (写真)、『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること—沖縄・米軍基地観光ガイド』、書籍情報社、2011年。

内容紹介 普天間、辺野古、嘉手納、ホワイトビーチなど、沖縄本島に存在する米軍の全28基地を完全撮影に成功!!1.詳細な地図入り観光ガイド2.須田慎太郎による撮り下ろし写真集(オールカラー・200点)3.矢部宏治による歴史的背景説明と読書ガイドの3方面から、徹底解剖。次々と明らかになる驚愕の真実。この島には、戦後日本の、そして世界の歴史の謎を解くカギが隠されています。

推薦理由 沖縄の状況を知ることは、京都で学ぶ私たちにとって、とても大切だと感じています。実際に沖縄を訪れる時には、ぜひ持って行っていただきたい。



大森 正夫

■ オットー・フリードリヒ・ボルノウ、『人間と空間』（大塚 恵一訳）、せりか書房、1978年。

内容紹介 安らぐこと、住まうことなど、人間が生きる上で考えなければならない課題について、真正面から本質的に論じている本です。建築論、空間論、造形論を学ぶ者にとっては必読の書といえます。

推薦理由 実存哲学と言う領域のものであり、冒頭から難しい説明が続いていますが、小説のように読む必要はなく、「空間論のバイブル」として、読みたい項目を気ままに読み進めれば良い本でもあります。項目も、さすらいあるきの小道、家屋のやすらぎ、気分づけられている空間、人間の共同生活の空間など、悩みを抱えていたり課題に突き当たった時に読むとイメージが湧いてくるような一冊です。

■ マルティン・ハイデッガー、『芸術作品の根源』（関口 浩訳）、平凡社、2008年。

内容紹介 芸術作品は、日常生活に回収される道具と異なり、世界と大地との亀裂の狭間に真実を顕現させる。哲学の「別の原初」を指し示し、ハイデッガー後期思想への「転回」を予示した記念碑的作品。ゴッホの農夫の靴やギリシアの神殿など具体的な芸術作品の分析を通して、後期ハイデッガーを予示する新たな真理観、存在論が展開される記念碑的作品。

推薦理由 本著の邦訳は何冊が出ているので、気に入ったものを読めば良いです。本書を薦めるのは、存在論哲学のハイデッガーによる芸術への眼差しです。真理は本来隠された物だが、優れた芸術作品は、世界と大地なるものとの闘いを通じて真理がみえてくるものである、というようなことを感じて欲しいと思います。ゴッホの“靴”という作品を解説している箇所がありますが、真の芸術に出会いたければ、この解説は学生時代に一読しておいた方が良いでしょう。

■ 大森正夫、『京都の空間遺産—社寺に隠された野望のかたち、夢のあと』、淡交社、2009年。

内容紹介 東寺・清水寺・金閣寺をはじめとする京都の世界文化遺産8社寺に見られる、美の作法をひもとくための芸術空間ガイド。社寺とは、思いを込めて時代を生きた人と造形（建物・庭・物等）とのコラボレーション。そこは日本文化のかたちが、ニッポン国の文化のスタンダードが凝縮している場所。本書では当時を再現したCGと解説から、そこに隠された決まり事を造形学的手法から解き明かし、為政者の野望のかけらを見つめてタイムスリップ。日本文化に携わる人、造形デザイナー必読の書。

推薦理由 本書は、一般の方や観光客向けではなく、芸術を学ぶ学生のために、京都を代表する社寺の造形的理解を通して、芸術の在り方、作品づくりへの姿勢などを学べるように書いています。「京都を語れば芸術論になり、空間を読めば人生論になること」が、本書の目的です。

■ 大森正夫、『京都、しつらいの空間美: 祭事に解く文化遺産』、鹿島出版会、2013年。

内容紹介 日本人にとってこここの抛り所とは何か。世界文化遺産の賀茂社（上下）と葵祭の祭礼を中心に、日本人の風土に生きるこのころの歴史、自然を愛で崇める気持、伝統文化に培う美意識の研ぎ澄ませなど、しつらい空間の原点を読み解き、CG再現図を含め明快に紐解くオリジナル本である。

推薦理由 芸術分野の人が学びにくいものの一つに「まつり」があります。日本人は祭好きは、さまざまなアートイベントやアートプロジェクトの多さからも見てとれます。京都で芸術を機会に是非とも日本のまつりの魅力に触れてもらいたいと思って書いた本です。まつりの根源的な意味から、身近で有名な「葵祭」の素晴らしさをガイドした珍しい本ですので、卒業までには読んでみてください。

■ 李禹煥、『出会いを求めて—新しい芸術のはじまりに』、美術出版社、2000年（新版）。

内容紹介 今日美術の一般状況の批判と肯定的地平の希求を行いつつ、具体的な論証として作家や作品や表現の方法などを検討。また近代世界観史の反省と模索を通して新しい芸術観の基点を探索する。第一部で、今日美術の一般状況の批判と肯定的地平の希求を、第二部で、具体的な論証として作家や作品や表現の方法などを検討、第三部で、近代世界観史の反省と模索を通して新しい芸術観の基点を探索している。

推薦理由 現代日本美術の基底を成す「もの派」の理論的リーダーであるリー氏の代表作です。美術に進もうとする若者が早い時期に読んでおくことを勧めたい一冊です。時代を越えて美術家になるために学ばねばならないことや、考えなければならぬことなどを示唆してくれる書物として、僕自身が大学2年時より後輩に手渡していた本です。



木田 豊

■ クロード・レヴィ=ストロース、『野生の思考』（大橋保夫訳）、みすず書房、1984年（第12版）。

内容紹介 「パンセ(黙想)」は敬虔なクリスチャン、物理学者でもあるB.パスカルの著書名であり、可憐な野草、「三色すみれ(パンジー)」のフランス名でもある。筆者は精緻なダイヤグラムによってトーテムと諸物、部族と親族の成員間の関係、種と個体、さらには歴史・弁証法へ論を進める。野蛮人、野生(sauvage)という形容詞を掛けた謎のタイトルが大衆に解き明かすものは、人類生存の基本構造であった。はたして、本書は全欧州の知性を震撼させ、フランス思想史の主流に、実存主義哲学から数学的論理性を持った科学へと大転換をもたらすこととなる。

推薦理由 今日の知の大奔流を理解する第一歩として、誰にとっても、特に芸術を志す大学生にとって記念碑的な1冊である。これほどに胸を躍らせる知的大冒険物語もまたない。著者の南米へのフィールドサーヴェイ旅行は、近代研究冒険紀行の鋳型ともなったのである。学問とはかくも力強く、驚きに満ちたものなのだ。

■ サン=テグジュペリ、『夜間飛行』（堀口大学訳）、新潮文庫、1956年。

内容紹介 南米アルゼンチンの郵便飛行会社支配人リヴィエールは、仕事を巡る数々の難題に押し倒されそうになりながらも、組織の進路を決め、敢然と運命に立ち向かわざるを得ない。悪天候について飛びながら、彼と通信を交わす、飛行士ファビアンとの不安と葛藤の一夜を通じて、人と仕事、社会的使命、そして自然という冷厳な関係をえぐり出す。これは小説というより、究極のドキュメンタリーを通じて描きだされた哲学書である。

推薦理由 我々人類とそれを支える地球、そして大気。また我々が思考して生み出した近代社会、組織とその使命。本書はこれらの関係を複葉機の飛行士の目を通して描き出す。過酷な職場や戦場において、悩み、打たれても再び立ち上がる主人公の登場する、戦後社会派ドキュメンタリー作品の多くが、本書からヒントを得ている。

■ ル=コルビュジェ、『輝く都市』（坂倉準三訳）、鹿島出版会(SD選書 33)、1968年。

内容紹介 オスマンの大改造から100年、膨張する人口にそぐわなくなった、19世紀末パリの悲惨な都市生活を暴き、都市行政における無知蒙昧と社会の理不尽を徹底的に糾弾するコルビュジェは、本書において、詩人であり、解放者であり、為政者である。そして新しいアパルトマン群のアクソノメトリック図によって、フランスの民主的精神を高らかに歌い上げる。そこには18世紀、ゲーテの希求した光があふれている。線の端正さに顕われた理性が我々に教えてくれることは、モダンデザインとはコルビュジェによって創始された、壮大な作品だということだ。

推薦理由 今日アメリカにおける前衛建築は、F・O・ゲーリやG・シーゲルなどによるグレー、正統派によるホワイトの2派に分類されることがある。難解なこの関係も、一方の始祖であるコルビュジェとその源流たる絵画芸術を紐解けば、またたく間に解けてしまうのである。モダンデザインが、そのコンセプトにデモクラシーを内蔵すると言われるゆえんだ。

■ 栄久庵憲司、『道具考』、鹿島出版会(SD選書 42)、1969年。

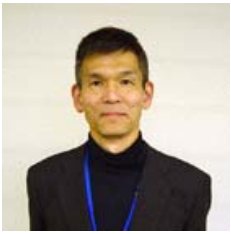
内容紹介 私たちを取り巻く、道具の数々や近代的家電製品群はどのように発想され、設計され、造形されているのだろうか？筆者によれば、それは人と物との授受一貫の関係に他ならないという。縁と断がこれを司るという。広島に僧侶の子として生まれ、青年期、京都知恩院に仏教を学んだという筆者は、戦後デザイナー集団GKを率い、2014年、伊・コンパッソドーロ賞の栄冠にも輝いた、国際的1人者でもある。

推薦理由 デザインはその性質上、一面的な工学的過程でもないし、文学的過程でもない。インダストリアルデザインと名付けられたこの行為にふさわしい比喻があれば、それは祈りにも似た、創造的行為である。しかも今日においてはそれは往々にして複数の人によって構成されるチームの所産である。デザイン初学者にこそ、本書は直感的指針を与えてくれる。

■ 土居健郎、『「甘え」の構造』、好文堂、1971年。

内容紹介 日本人の義理人情という考え方の根底には「甘え」という感情があり、「甘えこそが日本人の精神と社会的構造を説明する」とする筆者は、精神医学を専門とする、国際的な研究者である。米社会学者エズラ・ボーゲルによれば、本書は国際的な精神トレーニングを受けた日本人による、初めての書物である。明治期以降の文学が執拗に追及した、「近代的自我」の放棄に理論的支柱を与えた。

推薦理由 本書は社会批評書でも、啓発本でもない。あなたとあなたの家族、また会社の上司・部下、友人の行動を眺め、頭に思い浮かべながら読むと良い。読後、全五章が一気に脳髄に流れ込み、あなたの全てのもやもやや、戸惑いといったものを流し去ってくれたことに気がつくであろう。欧州都市のカフェにたたずんで一読されることも、是非お勧めしたい。



楠林 拓

■ パット・ムーア、『私は三年間老人だった』（木村治美訳）、朝日出版社、2005年（第2版）。

内容紹介 工業デザイナーである筆者が高齢者用の商品開発のために、3年間老人の変装をして過ごし、全く別の立場から社会をみつめるきっかけを得る。導入部は変装ごっこの範囲だが、筆者の目を通して、老いていく人間の苦悩や社会の中での立ち位置など、深い考察をもたらす。

推薦理由 ユニバーサルデザインという言葉もなく、若くて健康な人を対象に商品開発・設計が行われていた時代に、やがて到来する高齢化社会を見通した先見性には目をみはるものがある。20代だった筆者が、高齢者のためになにが必要かを探るために「変装」という大胆な手法をとった行動力は、年代の近い学生にも共感できる部分があるだろう。

■ 三原昌平他、『プロダクトデザインの思想<Vol.1>』、PDの思想委員会、2003年。

内容紹介 近代、現代の名作、名デザインと言われるプロダクトデザインにスポットをあて、デザイナーと彼らの思想について、文化や社会背景、技術の歴史などに触れながら解説をする書。紹介している製品はPhランプから、柳宗理のテーブルカッター、Apple社のマッキントッシュなどの形ある製品から、エレファントデザイン株式会社の空想生活などソフト・サービス部門におよぶ。

推薦理由 工業製品を含む、モノやサービスがその時の必然を持って生み出されてきた背景、制作者の思想に触れることができる。時代を切りひらいた製品のデザインは、表面的な審美性や機能を満足させるといった次元に留まらず、高い理想をもって生み出されてきたことを知るための資料となっている。

■ 日本インダストリアルデザイナー協会（JIDA）編、『プロダクトデザインの基礎』、ワークスコーポレーション、2014年。

内容紹介 プロダクトデザイン（以降PD）検定の内容を概説し、現在のプロダクトデザイン≒商品企画として初学者向けに用語解説を行っている。PDの背景、社会とPD、PDとビジネス、デザインプロセス、ユーザー調査の手法、コンセプト作成の手法、視覚化の手法、デザイン評価と科学的研究、マーケティングとデザイン、技術とデザインの章立てでプロダクトデザインを概観している。

推薦理由 情報化社会に突入し、ものづくり立国として君臨していた日本の地位がゆらいでいる。日本が得意としてきた分野で、海外メーカーが国内市場に参入し大きな成功を納めている。人々のニーズを汲み取って、量産・販売可能な形で提案するプロダクトデザイナーの位置づけも大きく揺らいでいる。PDをカタログ的に概観する手法ではあるが、市場牽引型のものづくり・企画を行う必要最低限の用語集が集められた近著としてPD分野での意義は深い。



佐藤 文郎

■ マルセル・モース、『贈与論』（吉田 禎吾/江川 純一訳）、ちくま学芸文庫、2009年。

内容紹介 ポトラッチやクラなど伝統社会にみられる慣習、また古代ローマ、古代ヒンドゥー、ゲルマンの法や宗教にかつて存在した慣行を精緻に考察し、贈与が単なる経済原則を超えた別種の原理を内在させていることを示した、贈与交換の先駆的研究。贈与交換のシステムが、法、道徳、宗教、経済、身体的・生理学的現象、象徴表現の諸原理に還元不可能な「全体的社会的事象」であるという画期的な概念は、レヴィ＝ストロース、パタイユ等のちの多くの思想家に計り知れない影響とインスピレーションを与えた。不朽の名著、待望の新訳決定版。人類社会のアルケーへ。（表紙カバーの文章）

推薦理由 モノの使用価値、交換価値では補足し得ない贈与という問題は、欧米の資本主義的市場経済を相対化する視点を与えてくれるという意味で、現代社会の抱える様々な問題に通じる。また、共同体の社会組織に関する分析は現代社会への鋭い反省を迫る視点へと通じている。芸術大学がモノへの考察を社会・経済・文化の視点から多重的に捉える契機になると考えられる。

■ 五来重、『石の宗教』、講談社学術文庫 1809、2007年。

内容紹介 日本人は古来、石には神霊が籠ると信じてきた。庶民は自然石を拝み、石を積み、あるいは素朴に造形して、独自の多様な石造宗教文化を育んだ。仏教以前の祈りの時代から連綿と受け継がれてきた先祖たちの等身大の飾らない信心の遺産。路傍の石が体現する宗教感情と信仰を解き明かし、埋もれていた庶民信仰の深い歴史を掘り起こす。（表紙カバーの文章）

推薦理由 民俗学の基本図書は柳田や折口の著作だろうが、師柳田の薫陶を受け、祖霊信仰としての山の神、田の神信仰を批判的に継承しつつ、仏教民俗学という新たなジャンルを確立した作者の視点は、例えば嵯峨野の生活文化を掘り下げる上で欠かせない視点を提供してくれる。アニミズムとしての祖霊信仰が修験道に引き継がれ、法華や念仏系遊行者に引き継がれつつ、庶民の生きるがゆえの悲哀や祈りが石の造形として遺されたことを鮮やかに浮かび上がらせる作品。

■ 佐藤信夫、『レトリック感覚』、講談社学術文庫 1029、1992年。

内容紹介 アリストテレスによって弁論術・詩学として集大成され、近代ヨーロッパに受け継がれたレトリックは、言語に説得効果と美的効果を与えようという技術体系であった。著者は、さまざまの具体例によって日本人の立場で在来の修辞学に検討を加え、「ことばのあや」とも呼ばれるレトリックに、新しい創造的認識のメカニズムを探り当てた。日本人の言語感覚を活性化して、発見的思考への視点をひらく好著。（表紙カバーの文章）

推薦理由 近代ヨーロッパで大成した文彩の諸相（直喩、隠喩、換喩等）を踏まえつつ、豊富な日本語文例と著者の軽妙洒脱な解説が加えられる。言語には意味内容を伝える、確認する、世界を分節するという機能だけでなく、気取りであり、遊びであり、捉え方や行為のあり方によって別種の豊かな可能性を開示してくれるという経験を持つための好著でもある。芸術の力の探究にとても言語活動の可能性は欠かせない視点であり、本著はその点で基本図書と考えられる。

■ 内田義彦、『読書と社会科学』、岩波新書 288、1985年。

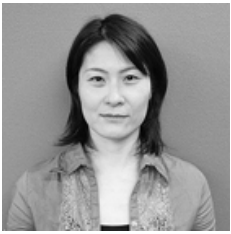
内容紹介 電子顕微鏡を通して肉眼では見えない世界を見るように、社会科学では、概念という装置をつかって現象の奥にある本質を見きわめようとする。自前の概念装置をいかにして作るか。それを身につけることで何が見えてくるか。古典を読むことと社会科学を学ぶことを重ね合わせて、本はどう読むべきかの実習を読者とともに試みる実践的読書論。（表紙カバーの文章）

推薦理由 社会科学への入門としては大塚久雄が思い浮かぶが、余りにひねりが足りない。社会思想の萌芽期からスミス、マルクスまでを縦横に研究した著者の文章は「資本論の世界」や「社会認識の歩み」とともに、いまだに絶版とならず岩波新書のラインナップを支える。講演記録から書き起こした平易な語り口で社会と切り結ぶ広い視野に読者を誘ってくれる。社会科学や倫理哲学への格好の入門書。

■ 白洲正子、『お能 老木の花』、講談社文芸文庫、1993年。

内容紹介 2代目梅若実について能を習い初めた4歳。渡米留学した14歳。厳しい教育を受け、後欧州にも赴く。爾来、古典芸能・文学・美術工芸に造形を深め美を追究。著者の芸術観の“核”となる能楽論、最初期の「お能」のほか「梅若実間書」「老木の花」を収録。実践に裏打ちされ平明、簡潔、強靱な筆致で綴ったエッセイ集。

推薦理由 著者は女性として初めて能舞台上がった人物でもある。能楽に関する魅力にあふれた書籍は他にも存在し、観世寿夫の著作には能役者としての深い思索の跡がうかがえるが、白洲がエッセイストとして著した最初期の「お能」を選んでみた。著者ならではの独特で、美に関する嗅覚が研ぎ澄まされる感覚を覚える。ただし、文章はあくまで平易であり、読書経験の薄い読者をも芸能の幽玄の境地へと導いてくれるものと期待できる。



下西 紀

■ DK&日東書院本社編集部編、『ビジュアルディクショナリー 英和大事典』岩坂彰ほか
訳、日東書院本社、2012年。

内容紹介 宇宙の成り立ちから現代の最先端技術まで、14分野、290にわたるテーマを6,000点以上の大迫力の写真と高精細イラスト、30,000語超の和英単語でわかりやすく解説。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 様々なモノが分解され、その断面図や分解図が写真やイラストなどのビジュアルイメージでとらえられる事典です。モノの構造やパーツに興味注がれるだけでなく、制作の着想を得る資料にもなるでしょう。

■ ギョーム・デュプラ、『地球のかたちを哲学する』（博多かおる訳）、西村書店、2010年。

内容紹介 ほんとうに地球はまるい?…さんかく?しかく?世界に伝わる地球の歴史と地理を探ろう。伝説に出てくる地球のすがたや、科学者が調べて描いた地球のかたち、それらの混ざったものなど、いろいろな地球のイメージが出てきます。ポローニャ国際児童図書賞受賞のしかけ絵本（「BOOK」データベースより）

推薦理由 科学が発展していない時代のさまざまな民族による地球のかたちが描かれています。世界観の類似、違いの比較が楽しめます。また仕掛け絵本でもあり、絵本の創作にも役立つのでは？

■ ジョン・A.ウォーカー／サラ・チャップリン、『ヴィジュアル・カルチャー入門—美術史を超えるための方法論—』（岸 文和/前川 修/佐藤 守弘/井面 信行/青山 勝訳）、晃洋書房、2001年。

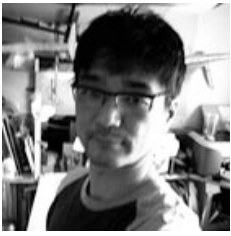
内容紹介 美術、インターネット、広告、デザイン、写真、映画、テレビ、建築、コンサート……私たちの生活を取り巻くさまざまな〈視覚文化〉の見取図を描いた本書は、カルチュラル・スタディーズやニュー・アート・ヒストリーを批判的に継承する新しい知へのナビゲータとなろう。（晃洋書房 <http://www.koyoshobo.co.jp/booklist/726/>）

推薦理由 美術史で対象とされてこなかった、美術、写真、映画、テレビ、広告、マンガ、ファッションなど、幅広い視覚文化を概観できる。教科書的なものとして編集された文献で、視覚文化を学ぶ学生の入門書として最良。

■ 伊藤慎吾（編）、『妖怪・憑依・擬人化の文化史』、笠間書院、2016年。

内容紹介 古代から現代、『日本書紀』から『妖怪ウォッチ』まで、文学・絵画・民俗資料や小説・マンガ等の中で、異類はどのように表現され、背後にどのような文化的要素があったのか。異類の文化を解き明かす初の入門書。（「BOOK」データベースより）

推薦理由 実在・非実在する異類は、多くの表現に用いられている。また擬人化などによるキャラクターは社会の中で活用されている。漠然とキャラクターを描くのではなく、日本の文化的要素にも注目しながら表現に結びつけて欲しい。



辻 勇佑

■ ブルーノ・ムナーリ、『ファンタジア』（萱野有美訳）、みすず書房、2006年。

内容紹介 デザイナー、芸術家、詩人、発明家、美術教育家……天衣無縫な創造活動を通し、驚きと気づきにあふれたモノたちを生み出しつづけたイタリアの異才、ブルーノ・ムナーリ。創造力ってなに??この、誰もが知りたい謎かけのような問いに挑んだのが、われらが先生、マエストロ・ムナーリだ。茶目っ気たっぷり目を輝かせ、引き出しから多種多様な図版をつぎつぎ取り出しながら、鮮やかな切り口で、新しいものが生まれ出るまでのメカニズムを分析・解明してみせる。（「BOOK」データベースより）引用：Amazon.com“ファンタジア”

推薦理由 創造を別の新しい視点から教えてくれる。見過ごしていた何かを発見させてくれる。十年ぐらい前、大学教員になった頃に教育という視点からデザインを教えてくれた一冊でちょっと困った時に開く本である。

■ 井上有一、『日々の絶筆 井上有一全文集』、株式会社芸術新聞社、1989年。

内容紹介 この本は、珍しいことに、書で、これまで誰も見たことのない、文字の未知の境界を切りひらいてみせ、その作品を見る人に新鮮な体験を与えた男が、制作の折々に記した文章を集めたものだ。（引用：日々の絶筆 井上有一全文集 p289本文8行目 海上雅臣によるあとがき）

推薦理由 私が今までに「格好いい」と思った作家のひとり、井上有一の文集。はじめて作品を見たのは20年以上前、東京で会社員のころで独立を考え始めていた頃。今のぼくを形づくっている要素の一つだと思う。作者自身の言葉で作品や人との関わりについて記録している。

■ 田中一光、『聞き書きデザイン史』、六耀社、2001年。

内容紹介 日本のグラフィックデザインを築いた25人の先達たちの軌跡を収録した貴重な自伝&証言集です。粟津 潔、今泉武治、今竹七郎、登村ヘンリー、川崎民昌、祐乗坊宣明、伊藤憲治、大橋 正、早川良雄、中井幸一、山城隆一、千田 甫、西島伊三雄、多川精一、増田 正、村越 襄、黒須 寛、中村 誠、木村恒久、永井一正ら25人の日本を代表するグラフィックデザイナーが語る体験的デザイン史。時代の波に翻弄されつつ、自らの才能で道を切り開いた巨匠たち。日本のグラフィックデザインの歴史がわかる他では読めない一冊です。（六耀社HPより<https://www.rikuyosha.co.jp/products/detail4132/>）

推薦理由 日本のグラフィックデザイン業界を築いた人たちの活躍を伝えてくれる本。今に続くグラフィックデザインの人の流れや繋がりが、制作の裏話が面白い。



増田 洋

■ 佐藤方彦、『日本人の鼻はなぜ低い？ 生理人類学の目』、日本経済新聞社、1990年。

内容紹介 この本は日本経済新聞に掲載された「体のナゾ」ナゾ」ナゾ」を加筆したのものである。生理人類学の立場から人間を眺めているが、軽いタッチタッチで読みやすいものである。

推薦理由 生理人類学の観点から、人間を分析しているが、軽いタッチタッチで読みやすいものである。大きく4つに分かれており、人間の感覚について、成長・成長・老化・性について、健康にかかわることについて、適応についてであるが、どこから読んでも読みやすいし、芸術を志す人が読んでも参考になると思われる。



森本 武

■ 『バガヴァッド・ギーター』（上村勝彦訳）、岩波文庫 赤68-1、1992年。

内容紹介 インド古典中もっとも有名な本書はヒンドゥー教が世界に誇る珠玉の聖典であり、古来宗派を超えて愛誦されてきた。表題は「神の歌」の意。サンスクリット原典による読みやすい新訳に懇切な注と解説をくわえた。（岩波文庫解説目録、2014）

推薦理由 なぜ人間は、この世で、種々の苦勞を背負い、生き続けなければならないのか、という途方もなく厄介な疑問に対して、この聖典は、この世を俯瞰した視点から暗示的解答を示してくれる。これまで、この聖典の日本語訳の生硬さが障壁となっていたが、上村訳はとっつきがいいので読者を増やしてくれそう。

■ 阿久悠、『作詞入門』、岩波現代文庫 900、2009年。

内容紹介 言葉の達人はいかに時代の芯を解剖して、既成概念を突破したのか。ヒットの秘密とは何だったのか。日常生活のなかで最初に試みるべき点から指南した本書は、作詞家のみならずすべての作家とその志願者に役立つ実践の仕事論。（解説：鴨下信一）

推薦理由 副題に「阿久式ヒット・ソングの技法」とある。揺れ動く時代を一つに括り、そこをフィールドとして、必ずヒットを出すという、あまりに直裁な目的を達成する技法が書かれてある。だから即役立つ。個人の創作計画から、大規模な企画のプロデュース、企業経営等、「創る思考」に関心をもつ方は是非ご一読を。

■ 鶴見俊輔、『文章心得帖』、潮文庫 238、1985年。

内容紹介 「余計なことはいわない」「紋切り型を突き崩す」等、実践的に展開される本質的文章論。70年代に開かれた現代風俗研究会の一般人向け文章教室が再現される。受講者の作文を引用し、問題指摘と改善案を提示しながら、「いい文章」を目指す。「文間文法の技法」なる高等技術に存分に高揚させられる。

推薦理由 谷崎、三島、丸谷など著名な文学者は「文章論」を書きたがる。また、ジャーナリストの本多勝一の『日本語の書き方』はロングセラー。さて、本書は、母国語成熟以前に長く米国で暮らした鶴見の独自の目が、特異で絶妙な日本語指南書を生みだしたとおもえる。名文、美文への羨望を、まず棄てよ。



岩崎 陽子

■ アンリ・ベルクソン、『思想と動くもの』（河野与一訳）、岩波文庫、1998年。

内容紹介 この本はフランスの哲学者・ベルクソンの論文集です。難しそうに思えても、一篇が短いのでゆっくり考えながらすぐに読めます。特に「変化の知覚」という論文は面白いです。私たちは日常生活をどのように生きているか、偉大な芸術とは何か、私たちが感じている知覚によって説明していきます。感覚を研ぎ澄まし、新たな発見をしていく人生について考えるきっかけになるでしょう。

推薦理由 私が初めて美学を大学で学び始めたとき（そんな名前の学問があることさえ高校生生の時には知りませんでした）、私の恩師に「もっともすぐれた美学者は誰ですか」と問うと即座に「ベルクソンです」とお答えになりました。その時は「なぜ？」と不思議でしたが、今となっては、物事を固定的に考えず、生を常に移り行く新しい瞬間の連続としてとらえるのは、垢にまみれた「だるい」日常の対極にある、すぐれて美学的な思考なのだとベルクソンを読んで思います。

■ ジョリス＝カルル・ユイスマンス、『さかしま』（澁澤龍彦訳）、河出文庫、2002年。

内容紹介 もしあなたが世界から切り離されてたった一人で住むとしたら、どんな部屋に住みたいですか？この本の主人公は人間嫌いで特異な趣味の持ち主。でもその美的趣味は徹底したもので、独りで引き籠る部屋の装飾、家具、絵画、香り、そしてペットまでも妖しくも美しい耽美的なもので埋め尽くす。極めつけは、亀の甲羅に黄金をかぶせ、ダイヤモンド、ルビー、サファイア、エメラルドで花の模様を埋め込むのである。その亀が暗色の絨毯の上を這うのを喜んで見るのである。ここまでくると変態の域に達しているが、その突き抜けた趣味へのこだわりがかえって読者の憧れを誘うのである。「私もそんな部屋を作りたい」。

推薦理由 美には「綺麗ななあ」では済まない妖しさ、狂おしさがつきまとう。『さかしま』を読むと、美の本質がわかる。ついでに役者の澁澤龍彦の本も同系統でおススメ。

■ 九鬼周造、『「いき」の構造』、岩波文庫、1979年。

内容紹介 「いき（粹）」の反対は「野暮」である。ヤボには誰もなりたくない。ではどうすれば粹なのか。九鬼周造は誰もが感覚的に感じ取っている「いき」の構造に多くの例を挙げながら核心に迫る。結局のところ「運命によってあきらめを得た媚態が意気地の自由に生きるのがいきである」と言われても？！ジタバタと往生際が悪く、好きな人にチラリと色気を見せるのが下手で、たとえ振り向いてもらえなくても堂々と胸を張って生きることができない人（私?!）は、「野暮」なのです。

推薦理由 「粹だねえ」と言われたらうれしいものだと思いますが、どこがどう「粹」なのかというのは、言い表しにくいものです。芸術とはそういうもので、ここがどうなって、あだから素晴らしい、とは説明できないものです。そんな曰く言い難い「いき（粹）」について、はっと目が覚めるほど素晴らしい（しかも短い）文章で本質を言い当てているのは見事です。芸術のあり方を考える上でも、恋愛のテクニクを学ぶのにももってこいの面白い本です。

■ 佐々木正人、『アフォーダンス入門—知性はどこに生まれるか』、講談社学術文庫、2008年。

内容紹介 アフォーダンス理論は20世紀後半にアメリカの心理学者ジェームズ・ギブソンによって構想された心理学です。「意味は脳にはない」「身体とまわりの世界には境がない」「私は複数の身体をもち、世界のあちこちにあらわれる」など、私たちが通常あたりまえだと思っていることを、環境や動物の視点から読み直す衝撃の1冊。芸大生必読。

推薦理由 「読む前と後で世界観がガラリと変わる」という本があります。私の場合学生時代に出会った現象学関連の哲学書と、そしてギブソンの『生態学的視覚論』でした。『アフォーダンス入門』はギブソンのわかりやすい解説書です。これを読んでからアフォーダンス理論を芸術やデザインに直接生かしたい場合は、佐々木正人著『レイアウトの法則—アートとアフォーダンス』（春秋社、2011年）もどうぞ。

■ 神林恒道／潮江宏三／島本浣編、『芸術学ハンドブック』、勁草書房、1989年。

内容紹介 芸術理論について短い章で事典風に「ハンドブック」として必要な部分を優先して読める本。誰でも芸術大学にきて一度は「芸術って何?」「合評はなんのためにある?」と悩むでしょう。その時にはこの本を手にとって、昔の思想家や歴史家が芸術についてどのように考えてきたかをちょっぴり覗いてみましょう。

推薦理由 芸術大学ではものをつくるだけでなく、ものとは何か、存在するとはどういうことか、誰に向けてなにをつくらうとしているのかを常に自分自身に問いながら過ごす場所です。思考の袋小路に迷い込んだ時に、頭の交通整理をするためにこの本は最適です。「わからない」、「もっと知りたい」と思う部分があったら、迷わず質問に来てください!

■ 赤瀬川原平、『超芸術トマソン』、ちくま文庫、1987年。

内容紹介 トマソンとは実在のアメリカの大リーガーである。大金でジャイアンツが日本に迎えたが、まったく打たずベンチにはりついていた。つまり無用の長物。作者は街の中にある「なんかすごいけど役に立たないもの」を仲間をつのって探し回る。昇っても降りるだけのどこにもたどり着かない階段、口が閉じてしまったポスト、引っ張れないドアノブ。この本はそれらの写真入りの記録である。そして立派な芸術論である。でも電車の中や、静かな喫茶店の中で読むではいけない。きっと大声で笑い始めると止まらないから。この本を読むあなたを、周りの人は白い目で見るでしょう。

推薦理由 芸大に赴任して、身近にアーティストと呼ばれる人種（とその卵）に接する機会が多くなりました。いつも驚かされるのは、見ているところの特異さ（変さ）です。「そこ?!そこは見るべきところと違うやろ」と突っ込みたくなるのですが、何気ない日常の、「変なもの」をいつも探して歩いているのですね、アーティストやデザイナーは。でも私も一緒になって探してみると面白かったです。トマソンはそんな芸術家の卵たちの入門書です。



大畑 真也

■ Norman Rockwell / Christopher Finch, *Norman Rockwell: 332 Magazine Covers*, Abbeville Pr., 2013(Reprint).

内容紹介 ノーマン・ロックウェルというアメリカの画家が手がけた「SATURDAY EVENING POST」誌のカバーイラスト集。

推薦理由 ノーマン・ロックウェルはアメリカの画家であるが、人々の営みや情景を描いた彼の作品はアメリカ人にとどまらず、国境を越えて外国人にも楽しめるものとなっている。その秘密は、緻密に描かれたリアリズムだけではなく、情景を演出するための画面構成や登場する人々のしぐさや表情、背景や小道具の描写にある。「人々の共感を得る」という芸術に欠かせない要素のひとつの答えが、この画家に作品に見ることができる。

■ 坂本龍一、『音楽は自由にする』、新潮社、2009年。

内容紹介 幼稚園での初めての作曲。厳格な父の記憶。高校でのストライキ。YMOの狂騒。『ラストエンペラー』での苦闘と栄光。同時多発テロの衝撃。そして辿りついた、新しい音楽―。2年2カ月にわたるロング・インタビューに基づく、初の語りおろし自伝。（Amazon.com（「BOOK」データベースより）引用）

推薦理由 日本を代表する音楽家「坂本龍一」の自伝。現在は還暦を超えている著者であるが、本書では幼少期から30代あたりの比較的若い頃を中心に書かれており、ひとりの作家がどういう学生時代を送り、何を考え、悩み、どういうプロセスで作品を生み出してきたかを追体験することができる内容となっている。音楽と美術というジャンルの壁を越えて作家として共感を得ることができる内容となっており、学生が制作や生き方について考えるときのひとつの道しるべになるはずである。



神谷 三郎

■ スティーヴン・キング、『書くことについて』（田村 義進訳）、小学館文庫、2013年（第3版）。

内容紹介 「われわれ三文文士の多くもまた、及ばずながら言葉に意を注ぎ、物語を紙の上に紡ぎだす技と術に心を砕いている。本書のなかで、私はいかにして『書くことについて』の技と術に通じるようになったか、いま何を知っているのか、どうやって知ったのかを、できるだけ簡潔に語ろうと思っている。テーマは私の本業であり、言葉である」（本文より） モダンホラーの巨匠が苦闘時代からベストセラー作家となるまで自らの体験に照らし合わせて綴った自伝的文章読本。 <裏表紙の紹介文からの抜粋>

推薦理由 スティーヴン キングが売れっ子小説家になるまでに何を考え、どんな暮らしをしてきたかを知ることができます。無駄な言葉を省くことを心がけながら書かれており、作者のことばがするすると頭に入ってきます。具体的なアドバイスの数々、作者が創作活動に注ぐ情熱の量は圧倒的で、読むと元気が出てきます。創作活動を継続するという楽しく辛い生活に身を投じる勇気を与えてくれる本です。

■ 西村佳哲、『自分の仕事をつくる』、ちくま文庫、2010年（第4版）。

内容紹介 仕事とはなにか。「いい仕事」はどこから生まれるのか。仕事を「自分の仕事」にするためにはなにが必要か。八木保を、柳宗理を、パタゴニア社を、さまざまな「いい仕事」をする人々を訪ねて回った貴重な記録。働き方が多様になってきた時代、迷ったら立ち戻りたい働き方のバイブルである。 <裏表紙の紹介文からの抜粋>

推薦理由 大学時代の友達が卒業後いろいろな職業に就いています。彼らに仕事はおもしろいか？と聞くといろいろなこたえが返ってきます。憧れの職業に就いて、そのうえとつてもおもしろいというのが一番幸せなのかなと思いますが、現実はそのないうまく行かないことの方が多いようです。この本を読むと、仕事とは何か？について考えさせられます。大学で学んでいることが将来の自分の仕事にどのようにつながっていくのか。仕事するよろこびとは何か。ぼくは社会人になってからこの本を読みましたが、大学生のときに読んでみたかった本です。



坂田 岳彦

■ 三井秀樹、『形とデザインを考える60章』、平凡社新書 115、2001年。

内容紹介 百余年前に日本の造形が欧米でブームとなった。そして今、自然に学ぶことの重要性が指摘されている。縄文の紋様、茶の湯、浮世絵、江戸小紋から、アールヌーヴォーとアールデコ、機能主義、ポスト・モダン、さらにはブランドブーム、CG技術まで、歴史を振り返りつつ、形の重要性を考えてみよう。わかりやすい60章のコラムが、日本の形の秘密を明らかにする。
(本書カバー見返しより引用)

推薦理由 時代が求めた形、気候や風土が選んだ形。人々の生活を支え、新しい時代のあこがれを創ってきた「デザインの形」を読み解くと「美に潜む原理」が見えてくる。新聞にシリーズ掲載されていたものなので、各論が導入的であり読みやすい。ここから新たな興味が生まれることを願います。

■ 谷崎潤一郎、『陰翳礼讃』、中公文庫、1995年（改版）。

内容紹介 「光と陰」の日本文化論。行灯、ろうそく、畳、漆器、屏風、障子、床の間……、かつての日本の暮らしを「光と陰」をテーマに、西洋との本質的な相違を示しながら日本美の本質を探る。

推薦理由 ろうそくに火を点け、ぼーっと明るくなるにつれて畳の目が浮き上がり、金屏風が光を反射して部屋全体を静かに包む——今の生活のようにほとんどが電化されるほんの数十年前までの「暮らしの愉しみ」を知ることができる。文明の利便に頼ることなく「いかに美を表現するか」。スイッチを入れた途端に部屋全体が明るくなる現代社会では、なかなか思いつかないような先人たちのアイデアを学ぶことができる。省エネ時代に読むのも一興かも。

■ シンシア・スミス 編、『世界を変えるデザイン ものづくりには夢がある』（槌屋詩野 監訳／北村陽子 訳）、英知出版、2015年（第1版）。

内容紹介 世界の90%の人々は、先進国にとってはあたりまえの商品やサービスにほとんど縁がなく、食糧や水、住居さえ満足に得られない。この90%の人々の生活を良くするには何が必要なのだろう。思いやお金ではない。実際にライフスタイルを変えられる具体的なモノが必要なのだ。消費社会にあふれるモノとは少し異なる、世界を変えるためのモノ。高価ではなく機能も単純だが、本当に切実に必要とされるモノ。そんなモノの数々を豊富な写真とエッセイで紹介する。世界に残された問題のリアルな姿とデザインの大きな可能性が見えてくる。（英知出版サイトの書籍紹介より一部改変）

推薦理由 デザインとは、一般に「ある問題を解決するために思考し、それを形として表現すること」といわれています。私たちの祖先は、自然や動物の脅威から身を守り、今日・明日を生き抜くために、さまざまな道具を生んできました。これはデザインの始まりであり、人類の歴史はデザインの歴史でもあるのです。ところが、現在のデザインの恩恵を受けているのはわずか10%。残りの90%の人たちのために、私たちに何ができるのか？ デザインの本質を改めて考えてみませんか？ 続刊の『世界を変えるデザイン2』もおすすめ。



佐野 仁志

■ 岡本太郎、『日本の伝統』、光文社 知恵の森文庫、2005年。

内容紹介 伝統とは創造であり、生きるための原動力であると主張する著者が、縄文土器・尾形光琳・庭園を題材に、日本の美の根源を探り出す。『今日の芸術』の伝統論を具体的に展開した名著、初版本の構成に則って文庫化。

推薦理由 従来の学術的な伝統論とは一線を画した岡本太郎の伝統論は、日本の芸術のあり方に新しい視座を与えてくれる。繊細な弥生式土器を日本の伝統の原点とするのではなく、荒々しいほどの力に溢れた縄文土器にこそ伝統の元はあるという。その時代のモダンアートであり、しかも力強いもの、生命力にあふれたものだけが、現在に残る。芸術作品における伝統とは何かを考える契機になればと思う。

■ 原田マハ、『太陽の棘』、文藝春秋、2014年。

内容紹介 第二次世界大戦後の沖縄にニシムイ芸術村が誕生した。食べることに事欠く沖縄の芸術家たちが共同体を作り、絵を描いていた。そこにアメリカの精神科医のエドワードやアランたちが訪れた。征服した側の人間と征服された側の人間が芸術を通して、友情の絆を結ぶ。エドワードはかつて画家になろうとして断念していたが、沖縄の画家たちの制作活動を通して、また描き始める。絵画に興味をもたなかったアランも彼らに触発されて描き始める。

推薦理由 絵を描くということがどういうことなのか改めて考えさせてくれる本である。以下に引用する。
「絵を描くことは、知的な遊戯のようなものだ。あるいは、好奇心を失わないための大人のたしなみのような。そんなふうを考えて、格好つけていた。それに比べて、この画家たちのたくましさはどうだろう。むさぼるようにみつめて、がむしゃらに描き写す。夢中で筆を走らせて、はつらつと彩る。そのエネルギー、情熱、個性。命のすべてで『描くこと』にぶつかる、荒々しい力強さ。」（94）

■ 原田マハ、『楽園のカンヴァス』、新潮文庫、2014年。

内容紹介 ニューヨーク近代美術館のキュレーター、ティム・ブラウンはある日スイスの大邸宅に招かれる。そこで見たものは巨匠ルソーの名作『夢』に酷似した絵。持ち主は正しく真贋判定した者にこの絵を譲ると告げ、手掛かりとなる謎の古書を読ませる。リミットは7日間。ライバルは日本人研究者・早瀬織絵。ルソーとピカソ、二人の天才がカンヴァスに籠めた思いとは…。山本周五郎賞受賞

推薦理由 芸術とは何かについて、画家、キュレーター、コレクターなどの立場から様々な見解が述べられている。また生前ほとんど評価されなかったアンリ・ルソーが生活苦の中、ピカソの支持を得て、死の直前まで情熱を失わずに描き続けた様は感動的ださえある。芸術に携わる者にとって、何が一番大切なのかをこの本を通して考えることができるのではないかと思う。



谷内 春子

■ 岡倉覚三、『茶の本』（村岡博訳）、岩波文庫 青115-1、2009年（第108刷）。

内容紹介 東京美術学校の創立者としても知られる岡倉天心が、「茶」を西洋人に理解させるために、英文で書いた「The Book of Tea」（1906）の翻訳本である。日本で翻訳される前に茶の本は仏語や独語にも翻訳され、「東方の理想」「日本の目覚め」と共に世界的に知られている。「茶の湯」を切り口としながら、芸術鑑賞に至るまでの東洋的な精神を紹介している。

推薦理由 茶を切り口としながら、東洋的・日本的と言われるような芸術的思想や趣向の根源をここに垣間見ることができる。非対称性や重複を嫌うこと、不完全性に美を見出すといった、無意識的に知識としてなんとなく知っている日本的なイメージや趣向の原風景をこの本に見ることができるといえるだろう。

■ 佐藤康邦、『絵画空間の哲学 思想史の中の遠近法』、講談社現代新書1007、1992年。

内容紹介 西洋や東洋における遠近法の歴史やその技法について、資料をもとに解説があり、さらに遠近法によって生まれる「空間」の哲学的考察を加えることで美学的な内容まで論じられている。遠近法と思想の関係を理解するのに役立つ一冊と言える。

推薦理由 ルネサンスに生まれた遠近法がもともとなったデッサン法を当たり前のように習ってきた美大生にとっては、その歴史的背景や、思想史的背景について考えるきっかけとなる本であると言える。また東洋的な遠近法ややまと絵の遠近法の基礎的知識が得られる本として、オススメしたい一冊と言える。



堤 抄子

■ 水木しげる、『水木しげるの妖怪事典』、東京堂出版、1981年。

内容紹介 水木氏の細密なペン画で数々の妖怪を紹介。民俗学的な格調がある。古い本ですが、今でも売られています。

推薦理由 姿形が伝えられていなかった多くの妖怪にビジュアルイメージや関連付けを与えたのが水木氏であり、現代人が「あの妖怪ね、知ってるよ」と思ってる妖怪の姿は実は水木氏の創作だったりします。その意味でも歴史に残る存在だと思います。昔の何度かの鬼太郎ブームのあと、水木氏が復活するきっかけになった本でもあります。

■ 田辺聖子、『枕草子（ビジュアル版 日本の古典に親しむ）』、世界文化社、2006年。

内容紹介 田辺聖子によるわかりやすい現代文と、美しい写真で、清少納言の世界へと誘うビジュアルブック。大きめの文字と豊富な読み仮名で、初心者や年配の読者に配慮。見開きごとの脚注で、知らない言葉もすぐにわかります。（「MARC」データベースより）

推薦理由 平安の人々に共感しやすい現代訳で、古典の苦手だった人には新しい世界が開かれるのではないのでしょうか。この時期の日本の文化に愛情がわき、美しい写真にもイメージを喚起させられます。このシリーズは美術系の学生には良いと思います。



中井 浩史

■ ゲルハルト・リヒターほか、『ゲルハルト・リヒター 写真論／絵画論』（清水穰訳）、淡交社、2005年（増補版）。

内容紹介 リヒターの作風は、写真を描いたフォト・ペインティングから抽象絵画、鏡から色パネルまで多岐にわたるが、その問題意識は一貫して写真性と光をめぐっている。真性と光は絵画とどのように関わりあうのか、本書はその40年分のドキュメントでもある。（本書カバー裏テキストより）

推薦理由 ゲルハルト・リヒターへのインタビュー、自身の制作ノートからなる。現代の絵画表現に関わる者にとって示唆に富んだ多くの言葉に出会える書である。

■ 森村泰昌、『美術の解剖学講義』、ちくま学芸文庫、2001年。

内容紹介 マネやベラスケス、レンブラントらの作品を名画たらしめている意外な事実、美術における「真と偽」あるいは「よし悪し」、愛ある写真を撮るための「アーネスト・サトウの写真術」、そして21世紀の美術のゆくえとは……美術家 森村泰昌によるわかりやすいレクチャー。（本書解説・深井晃子のテキストより引用）

推薦理由 現代美術を、鑑賞する、制作する者に、本質的で、当たり前だが鋭い視線を提供してくれる。理解のためのトピックがふんだんにちりばめられており、言葉にしにくい理念を解りやすく「講義」する。そもそもの「美術」について「生き方」について考えさせられる。

■ 林道郎、『絵画は二度死ぬ、あるいは死なない（全7巻）』、ART TRACE、2003年～。

内容紹介 Cy Twombly、Brice Marden、Robert Ryman、Andy Warhol、中西夏之、Sigmar Polke、Ross Blecknerの絵画の仕事とそれについての言説を取り上げた林道郎氏によるレクチャーの内容及び参加者とのディスカッションの内容をテキストとしたもの。

推薦理由 絵画を学ぶ学生にとって、今日の絵画表現の可能性を探るうえで、思考の端緒となる内容である。7人の作家についてのレクチャーと対談がリアルであり、平易な文章表現も取っ付きやすい。



細谷 僚一

■ 原研哉、『「日本のデザイン」 美意識がつくる未来』、岩波新書1333、2011年。

内容紹介 まさしく歴史的転換点に立つ日本。大震災を経てなおさら、経済・文化活動のあらゆる側面において根本的な変更をせまられているいま、この国に必要な「資源」とは何か？マネーではなく、誇りと充足への道筋を一。高度成長と爛熟経済のその後を見つめ続けてきた日本を代表するデザイナーが、未来への構想を提示する。（表紙カバー説明文）

推薦理由 世界的なデザイン展など時事的な記述も含まれる。したがって、20~30年後には色あせて感じられる部分もあるだろう。しかし、全体として巨視的な観点をもつ未来志向のデザイン論である。注目したい点は、本学を特徴づける「観光デザイン」を扱っている「観光—文化の遺伝子」の章である。ほぼ同一テーマで書かれた内田繁の「普通のデザイン」とともに、西欧近代が行き詰まりをみせている今日、日本の美意識が新しい時代をどのようにして切り拓いていくかを熱く語りかけている。

■ 佐藤学監修、『「驚くべき学びの世界」 レッジョ・エミリアの幼児教育』、ACCESS、2011年。

内容紹介 レッジョ・エミリアの教育学の特徴はアートの創造的経験によって子供の可能性を最大限にひきだしているところにあります。子供たちは「驚き」を受け止め、大切に育て、そこから新しいプロジェクトを生み出していきます。子供たちを予定された結論に導くのではなく、教育者も常に新しい発見を求められます。つまり、子供と教育者がともに冒険旅行をするのです。（「驚くべき学びの世界展」案内）

推薦理由 本書は世界的に評価を受け注目されている北イタリアの小都市であるレッジョ・エミリアの幼児教育のドキュメンテーション（学びの軌跡）である。その特徴は、教育プロジェクトと不可分の想像力を刺激し豊かに発想する環境構成、保護者や市民参画の協働性、国際的なアーティストや教育者、教育学者のネットワークの形成などである。幼児教育に限らず、アートを中心に据えた新しい学校の姿やアートの根源的な可能性を垣間見せてくれる書として推薦したい。

■ 佐藤道信、『〈日本美術誕生〉近代日本の「ことば」と戦略』、講談社選書メチエ、1996年。

内容紹介 日本美術史は①19世紀の国際情勢の中で生まれた、②近代日本の国家思想による歴史の再編であり、③作品というモノのヴィジュアルイメージによりながら、④その実、ことばによって記された言説の体系である。（本書「終章」部分）

推薦理由 受験対応もあって、日本の学生は近現代史に弱い。とりわけ、美術系大学生にとって政治・経済などの社会の在り方や変化と自らの専門とのかかわりについての認識が極めて希薄である。言うまでもなく、美術史・美術館・展覧会・美術学校・美術教育などは、明治初期に西欧から移植された「美術」という概念に基づく美術の制度化の中で生み出されたものである。自らの足元を照らし歩むべき方向を定めるために、北澤憲昭の「眼の神殿」「境界の美術史」、木下直之の「美術という見世物」などと併せて読むと理解が進む。

■ 山下柚実、『「五感生活術」 眠った「私」を呼び覚ます』、文芸春秋240、2002年。

内容紹介 五感を揺さぶり活性化し、感覚を研ぎ澄まし、こわばった身体を解放し豊かな感性を蘇らせるためには、どのようにすればよいか。新たな世界との出会いと自分自身の再発見を日常の生活の中でいかにして追究するか。具体的でわかりやすい。感覚論、感性論、身体論の入門書である。

推薦理由 リチャード・E・シトウィックの「共感覚者の驚くべき日常」（草思社2002）や岩崎純一の「音に色が見える世界」（PHP新書2009）などが示すように、本来五感を含む諸感覚は密接に連関しているものだろう。「共通感覚論」（岩波現代選書1979）で中村雄二郎が述べているように、芸術は五感そのものの精錬と組み換えを先取り時代を見通す試みであるとすれば、視覚や触覚を中心に展開する美術・デザイン専攻学生にとっても、他の感覚を鋭敏にし、音楽や料理・香りの文化などに関心を向けることは極めて重要である。

■ 松岡正剛、『「知の編集術」 発想・思考を生み出す技法』、講談社現代新書1485、2000年。

内容紹介 そもそもすべての情報はなんらかのかたちに編集されています。法のかたち、スポーツ・ルールのかたち、音楽のかたち、テレビ・ニュースのかたち、学校教育のかたち、科学法則のかたち。われわれは編集世界というものの中で生きているのです。しかし、このような情報を、われわれにとって必要なものとするには、それなりの方法が獲得されなければなりません。（本書「はじめに」部分）

推薦理由 「無からの創造」や「作品の完結性」など近代的な創造や作品概念が有効でなくなったとき、「引用」（宮川淳）・「増殖」・「生成」、そして「編集」などが新たな知の技法として生み出されるのは必然である。過去の表現の堆積、情報や素材、テクノロジーなどをいかにして拾い上げ、創造的に編み上げるか。編集工学研究所所長でありISIS編集学校校長でもある松岡正剛は、「編集」を企画力や表現力などに働く基本的技法として普遍化しようとしている。書評サイト「松岡正剛の千夜千冊」など、松岡ワールドへのいざないの書としても薦めたい。